

COP20・お助け用語集

気候ネットワーク作成 (2014. 12. 10)

● カントリー・グループ

(アンブレラや AOSIS などの有名どころは置いておきまして…)

LMDC

(Like-Minded Developing Countries) 「同志途上国グループ」

中国、インド、スーダン、エクアドル、サウジアラビア、ボリビア、ベネズエラ等で構成されるグループ。

地域・文化・思想の共通点はないが、「先進国・途上国の区別」で団結。先進国の責任追及・先進国からの支援を強く求める。会議のたびに結束を強めているが、メンバーには入れ替わりもあり、立場の違いも垣間見える。

AILAC (Alianza Independiente de America Latina y el Caribe) 「独立中南米カリブ諸国連合」

ペルー、コスタリカ、コロンビア等の途上国から構成される、中南米・カリブ地域のグループ。

LMDC や ALBA (ボリビア・ベネズエラなどで作られるグループ) とは異なり、先進国に対策強化や支援を求めつつも、途上国も前向きに取組みを強めようという立場を取る。先進国と途上国の対立の仲介役としての役割に期待が高い。南米 COP であるリマ会議でがんばって！

EIG (Environmental Integrity Group)

「環境十全性グループ」

スイス、ノルウェー、リヒテンシュタイン、モナコ、メキシコ、韓国等からなる交渉グループ。

先進国と途上国が入り交じった珍しいグルー

プだが、存在感を示すためにグループを作ったとの話。ポジションはそれなりに前向きながら中途半端な印象もある。

● 交渉の Hot Topics

INDCs (Intended Nationally Determined Contributions) 「国別目標案／約束草案」

COP19 (ワルシャワ会議) の合意に基づき、2015 年 3 月までに提出することが求められている、各国の温暖化対策の目標案。日本政府は「約束草案」と呼んでいる。

最近 EU や米中が発表した 2020 年以降の新目標は INDCs の提出を見越してのこと。ただ、とある日の出づる先進国は INDCs の検討を始めたばかり。

Scope 「範囲」

合意に含めるテーマ(緩和、適応、資金、技術、能力構築等)の範囲。INDCs や 2015 年合意の要素を語るとき、欠かせない言葉の 1 つ。先進国は緩和(中心)にしたいと言い、途上国は適応、資金、技術なども含めるべきと主張し、大きな平行線状態が続く。緩和は大事。一番大事。だけど気候変動問題への対処を進めるため、もはやそれだけではすまない。新枠組みでの範囲を緩和に固執しすぎると、スッコロブ(スコープ)。

CBDR&RC (Common but Differentiated Responsibility & Respective Capability) 「共通だが差異ある責任・個別の能力」

CBDR は、気候変動枠組条約第 3 条の原則。地球温暖化への責任は全世界共通のものだが、「歴

史上及び現在の世界における温室効果ガスの排出量のうちの大部分は先進国において発生したものであること、途上国の1人当たりの排出量は依然として比較的少ないこと」から差異があるとされ、先進国に思い責任を課す言葉となっている。京都議定書はこの原則に基づき策定。RCは、各国の経済的・政策的な能力には違いがあることを示す。

ただし、各国の責任も能力は条約採択時から変化しており、現在の実態に合った責任と能力の差異化(differentiation)のあり方が模索されている。具体的には先進国・途上国を二分することを固定するのか、進化を取り入れるのか？古くて新しい、歩み寄りの最も難しい大きな課題だ。

Ambition 「野心／意欲」

各国の行動の意欲度を指す。「野心を引き上げる(raise ambition)」という言い方がよくされる。排出削減の場合だと、削減目標の水準を指すが、適応や資金の行動も指すことがある。クラーク博士の”Boys be ambitious!”とは関係ない。

No-backsliding 「後退なし」

削減目標や対策などで、これまで決定したこと・実施していることを後退させないことを指す。リマ会議でも多くの国が強調している。これまで総量削減目標を掲げた国がそれを取りやめたり、削減目標を下方修正したりすることはしないように、ということになる。例えば、日本のように京都議定書で義務を持たなくなったり、25%削減から3.1%増加に目標を後退させたりしないように、ということだ。

Ratchet up mechanism 「引き上げメカニズム」

目標や行動を徐々に引き上げていくメカニズム。発想はボトム・アップだが、「アップ」に魂を込めて読むことが大事。INDCsはまず各国が決

めることから始まるが、その目標や行動は十分ではない可能性が高いため、2°C目標に照らして十分かを科学的見地から検証し、不十分な場合は引き上げていくことを組み込もうとするものだ。透明性を高め、事前協議を行い、段々と行動を引き上げていくことが繰り返されるプロセスが想定される。10年間より5年間の期間(サイクル)が提案されるのは、各国が怠けず対策を取っていくことと、適切に「引き上げメカニズム」で、排出ギャップを埋めていくことが期待されるからだ。

Mol (Means of Implementation) 「実施手段」

途上国が、緩和(排出削減)・適応行動を実施するために必要な手段として、資金・技術開発移転・能力構築(キャパシティ・ビルディング)をまとめて指す。途上国は、Molへの支援を強く求めており、緩和・適応とともに、2015年合意にバランスよく入れるよう提案している。範囲の議論ともかぶる話。

GCF (Green Climate Fund) 「緑の気候基金」

2010年のカンクン合意で設置が決まった気候変動枠組条約の下の基金。しばらく「空っぽのお財布」状態だったが、ワルシャワ会議(COP19)で運用ルールが決まり、ようやくお金が入り始めた。今回のCOP20の前までの目標であった100億ドルの拠出は、アメリカ・日本を始めとした先進国を中心に拠出表明が続き、達成水準に至っている。しかし、1000億ドルの拠出を2020年からは毎年拠出することも合意されており、これでおしまいではない。1000億ドルに向け資金拠出を拡大させるロードマップづくりが関心を集めている。

CAN (Climate Action Network)

「気候行動ネットワーク」

知らないなんて、言わせません。